ゲルマン封建期の都市広場の成立と展開

渡 辺 達 三

The formation and the development of the town square in the Germanic feudal age

By satomi WATANABE

I はじめに

本論は、古典古代の広場にひきつづき、ゲルマン封建期の都市の広場の成立とその展開過程について史的に考察することを試みたものであり、昭和42年度の修士論文⁽¹⁾の一部抄録要旨である。

アグラ・フォーラムは、「古典古代的」形態の「共同体」⁽²⁾に媒介されながら、古典古代社会の成立・展開とともに成立・展開し、その滅亡とともに変質していったこと⁽³⁾をみたが、ゲルマン封建期の広場も同様の過程をたどつていったと考えられる。

さて、マルクスは「中世（ゲルマン時代）は農村を歴史の中心として出発し、そののち歴史の進展は都市と農村との対立のうちにづけられる」⁽⁴⁾と指摘しているが「『ゲルマン的』形態のばあい基本共同態はいまや『村落』一定住形態としての『村落制』*Dorfsiedlung* というよりはもう少しひろい土地占取者の隣人集団という意味での『村落』*Nachbarschaft—gemeinschaft—*となり、したがって共同体はすぐれて『村落』共同体の姿をとるにいたつた」⁽⁵⁾という。

中世広場を「共同体」との関係でとらえようとする場合、「村落」の広場を考察することは不可欠な条件となると考えられ、また、事実、「村落」の広場は共同体との関係においても、またそれ自体としても、きわめて興味ある事例を豊富に提供⁽⁶⁾し、都市の広場のうち、「村落」の広場の系統をひくものを多く認められるのであるが、「村落」の広場については他日に期したいと考える。

また本論では、その考察対象地域についても、標題の観点から、アルプス以北の都市に確定したいと考える。南欧は、広場のよつて立つ社会経済的基盤もアルプス以北のそれとは性格をかなり異にし、その反映およびその他の条件を反映して、その広場も、広場史上、重要な独自の存在の態様を示すので、ここでは、南欧の都市の広場については、一応、考えないこととする。

さて、古典古代の広場と同様な問題意識をもつて標記の課題を考察しようとする場合、つぎのような視角が当然要求されるであろう。

A 歴史時代の広場は「共同体」の存在を不可欠な媒介

条件とする⁽⁷⁾が、「古典古代的形態」、「ゲルマンの形態」の「共同体」の共通相違点は、広場の社会・経済的、空間的な存在の態様のうえでいかなる共通相違点をもたらしただか。

B ゲルマン封建期の広場は、古代ギリシャ、ローマの広場の空間的成果の遺産を継承したと考えられるが、それはいかになされたか。

C 「ゲルマンの形態」の崩壊を契機として「共同体」関係は揚棄され、それにともない広場もその存在根拠を失うにいたるが、その場合と広場の崩壊過程において「共同体」関係そのものは崩壊させなかつた「古典古代的」の場合とはいかなる相違した形態をとるか。

しかしながら、これらを一定の密度をもつて追跡することは今日の学界の水準、筆者の力量からして、ほとんど不可能に近いと考えられるので、問題提起にとどめ本論では、広場存在の社会・経済的な関係よりも、その結果として表出された空間形態に焦点を合せて考察してみたいと考える。

(1)、(7) 渡辺達三；『広場の歴史的研究』修士論文 1968

(2) 大塚久雄；『共同体の基礎理論』岩波書店 1962

(3) 渡辺達三；「古典古代の広場の成立と展開」(『造園雑誌』Vol. 32 4 9-15)

(4) Marx, K. ; *Formen, die der kapitalistischen Produktion vorhergehen* (岡崎次郎訳『資本制生産に先行する諸形態』青木書店 1963 22-23)

(5) 大塚久雄；op. cit. 87-90

(6) 例えば、アルプス以北の諸村落の景観を特徴づける園圃農業と集村の複合およびその集村の中心地としての広場 Angerdorf (Gutkind, E. A. ; *Urban Deuelopment in Central Europe*. 1964, Vol. 1 chapter 3, Martiny, R. ; *Die Grundrissgestaltung der Deutschen Siedlungen in Sohlesien*, 1930 等参照)、スラブの Rundling (Gutkind, E. A. 前掲書 Zucker, P. ; *Town and sguare*. 1959 等参照)、イギリスの Green village (Thorpe, H. ; *The Green Villages of County Durham*, Zucker, P. 前掲書等参照) 等がある。

Ⅰ ゲルマン封建都市の広場の成立

Sitte は中世における広場について、i) Domplatz (Cathedral Square=教会前広場)、ii) Hauptplatz (Secular main platz=領主の館の前の広場)、iii) Marktplatz (Market place=市場広場)の三つの型をあげているが(1)、ii)の型の広場は、基本的に南欧の都市貴族を背景とするところに顕著にみられる広場であり、アルプス以北の都市においてはそれほど重要でないと考えられるので、本論では、i)、iii)の型を中心に考察してみたいと考える。

Ⅰ-1 教会前広場の成立

Zucker は「中世の Parvis すなわち教会の広場はそれが一つの建物だけに支配されている点で中世の市場広場と構造的に異なる」(2)と述べているが、これは教会前の広場の性格をよく表現していると考えられる。すなわち、それは、教会前の広場が機能的・構造的に教会と一体となつて、しかもそれに支配されている関係を示しているのである。

彼はまた「Parvis は機能的に初期キリスト教、ビザンティン、ロマネスクの Narthex (教会の中に入れない新参者のために設けられた入口の間)に起源すると考えられる」(3)と述べているがこれはそのような関係を起源的に説明しているものといえる。

そして、その Narthex は、しだいに教会の前庭へと発展し、さらにそれは、必ずしも教会と関係のない集會、市場、演劇のための場としても用いられるようになり、教会の機能と離れがたく結びつきながらも、少くとも機能的には広場の性格をも同時にもちはじめていた。

やがて、それは、「共同体」の成員であれば誰でも自由に入ることのできる空間となり、必ずしも、特殊な教会の機能と関係する用件を媒介とする必要がなくなり、「共同体」の成員の精神的な核となつていつた。ここに教会前の空間はもはやその前庭というよりは、すぐれて広場というにふさわしい存在となつたといふことができると考えられる。

Ⅰ-2 市場広場の成立

市場広は Zucker のいうように (4)主なる大通りの広がつてできた広場、(5)大通りの側方に広がつてできた広場(4)があるが、さらに、筆者は (6)集落の入口にできた広場を便宜的に、これに含めようとする。

(4) 主なる大通りが広がつてできた広場(5)

自然に成長してきた集落は交通がその集落のコミュニケーションの重要な意義をもっているために、集落の主要な道路が自動的に市場広場になることがある。このタイプの広場は多くの場合集落の規模が小さく、その人口密度が低く、商業活動の比較的小さい地域においてみられる(例: Bernburg, Westphalia の Münster の Mar-

ket street)。やがてこれらの通りは、交通を妨げることなく三次元的な閉塞された空間形成への志向がみられるようになる(例: Innsbruck の Theresienstrasse, Augsburg の Maximilianstrasse の Markt Street)。さらにハンザ都市の Lüneberg 等の大通りのゴシック、初期ルネッサンスの家並ののきが規則正しく大通りにつき出し大通りをその両側からすくいあげるようにして独特の統一ある閉塞感をだしているような例もある。

ここに、形態的にも、しだいに広場として充実していく過程を認めることができる。

(6) 大通りの側方に広がつてできた広場(6)

交通量が増加し、通過交通が激しくなるとともに広場活動は著しく妨げられるようになるが、このような場合道路は側方に広がりそこが広場となる場合がある。この場合には広場は道路と連結し、しかもそれに妨げられることなく活動できるようになる。そして、これが一定程度成長するとそこに町会所や教会が建設され広場としての性格をいつそう強めるようになる。

(7) 集落の城壁の内側にできた広場(7)

城門前の空地が集落の内外との物資の交換の場、集落への交通の起点となり広場へと発展する例、Dinkelbühl, Nördlingen, Rothenburg, Landsberg am Lech 等の広場がある。いずれの場合も市場広場の機能は、まず、道路において代償的に求められ、やがて、そこが広場として空間的にも、しだいに充実していくものであると考えられる。

(1) Sitte, C. ; Der Städtebau. Fünfte Auflage.

Wien, 1922. P. 15

(2) Zucker, P. ; Town and Square. New York, 1949, 80-81

(3) Zucker, P. ; ibid.

(4)、(5)、(6)、(7) Zucker, P. ; op. cit. 75-80

Ⅱ ゲルマン封建期の都市広場の発展

Ⅱ-1 第1期 (～11C)

広場を必要とする社会的条件は存在しているが、いまだ、それを充足させるための、すぐれて広場といふ専用の空間を分化させるにはいたっていない。

この期においては、のちに教会広場、市場広場において充足するべき広場の機能は、それぞれ、教会の Narthex 道路等において代償的に処理されている。

Ⅱ-2 第2期 (11～14C)

広場を必要とする社会的条件は、その専用の空間として、前期の空間の発展的変質または、新たな空間として広場を現出させるにいたる。

形態は、一般に不整形で、三次元的な閉塞性は低い。空間意識はほとんど認められず、広場は、地域の必要と

一次的に結びついた存在であり、集落全体のうちに有機的に位置づけられてはいない。

図-1はフラクブルク Freiburg im Breisgau の教会広場を示しているが、この広場は墓地 churchyard に起源するものであるという。

図-1 教会広場 Freiburg im Breisgau
(Ritte, Der Städtebau⁽¹⁾ より)

門前通り Münsterstrasse は教会の西側のファサードに直接入り込み、他の道路も、広場に斜めに入り込み、教会と広場との間には空間的な統一感に乏しい。これは教会が、当該地区のロケーションを無視して、厳格に東西方向に建設されたことによる。

広場自体も、この段階では、空間密度は低く、たんなる空地的な相貌をおびている。このような例は、ウルム Ulm その他各所に見い出すことができる。

図-2は典型的な中世の広場の一つの例であるが、それは道路が広がったことにより成立してきたものであることを示している。

図-2 北独の道路起源の広場
(Meurer, Der mittelalterliche Stadtgrundriss
im nördlichen Deutschland⁽²⁾ より)

この広場は、元来集落の大通りであり、そこに市場を核とする広場的な利用がなされ、そのために、道路の当該部分の幅員が広がり、やがて、そこに教会、町会所 town hall 等が設けられたものである。それらは、たんに広場の施設としてばかりでなく、空間の閉塞性を強める、空間の構築要素としても機能し、大通りの当該部分は、空間的にもしだいに広場としての性格を強めてきたものである。

市場広場は道路起源である場合が多いが、道路はいまでもなく一般に、交通頻繁であり、機能的にも、視覚的にも、広場としての閉塞性に欠ける場合も多い。しかし、これらのうち、広場として成功している例のうちの多くは、空間的な種々の工夫が、意識的・無意識的になされている。図-3はインスブルク Innsbruck のマリアテレジア通り Maria Theresienstrasse の例であるが、道路の広がった部分の中央には聖アン St. Ann の銅像が立ち、この部分の一つの焦点を形成し、背景には、アルプスの山々がそびえ、二の部分の空間的な統一感と閉塞感を醸成している。

図-3 マリア・テレジア通りの広場
(Zucker, Town and Square⁽³⁾ より)

他にアウグスブルク Augsburg のマキシミリアン通り Maximilianstrasse 等興味ある事例も多い。

さらに、広場の独自性の論理が強くはたらくとき、広場は、道路の側方に、新たにできる場合がある。この場合も、道路が広がってできる広場の場合と同様、広場の重要性が増加するにともない、教会、町会所等が設けられ、広場として空間的にも充実度をましてゆく場合が多い。

図-4はロイトリンゲン Reutlingen の場合であるが、ここではこのような例をいくつかみることができる。

図-4 ロイトリンゲンの市場広場
(Klaiber, Die Grundrissbildung der deutschen
Stadt im Mittelalter⁽⁴⁾)

また、城門の入口にできる市場広場もある。これは、都市と農村との、工業製品、農産物等の資物の交換の場、人馬の交通の場として重要な位置をしめ、しだいに

広場としての性格を強めてきたものである。

Ⅲ-3 第3期 (14~16C)

広場は、集落の社会経済的な機能上の必要性和即自的に結びついていた前期の段階から、その集落でのあり方が反省され再評価されるようになり、都市計画的観点から関心がもたれるようになる。

こうして、この期の広場は、集落の核としての機能に都市計画上の関心がもたれ、新都市の計画、建設にはその中心におかれるようになる。また従来からある集落の広場にも同様な意義が認められ、新たに広場が建設されることもあつたが、旧来からあつた広場もこのような基本的な理念にそうべく改良されそれに充たさせられる場合も多かつた。

そのため、この期の広場は、一般に、しだいに整形、閉塞への志向を示し、集落全体と統一的に結合するような傾向を示すようになった。

しかしながら、他方、このような傾向が昂じて、広場は、その共同体の核としての本来の機能が忘れられ、その空間的な効果の演出の構成要素としての意義が重視され、しだいに実体のともなわない空間へと変質する契機をもちはじめた。それは、また、都市共同体の徐々の、しかし、確実な崩壊の準備の過程の忠実な反映でもあるといえることができるであろう。

図一5はいくつかのなされた理想都市のプロジェクトの一つであるが、これは、都市計画の上で広場がいかなる評価がなされていたかを雄弁に物語る例であると考えられる。

図一5 Vincenz Scamozzi の理想都市の計画案
(Zucker, Town and Square(5) より)

図一6はレーゲンスブルク Regensburg の教会広場であるが、ここでは、大聖堂のファサードに向かって計画された奥行き深いタイプの大聖堂広場と横に広いタイプの広場が、教会のファサードを意識して統一感ある空間

構成を形成すべく努力されている。

図一6 レーゲンスブルクの教会広場
(Sitte, Der Städtebau(6) より)

図一7は、ダンツィヒ Danzig のランゲマルクト Lange Markt の例であるが、これは、この期の広場の性格をかなりよくあらわしていると考えられる。

図一7 ダンツィヒのランゲマルクト
(Zucker, Town and Square(7) より)

ダンツィヒはスラヴの集落起源であつたが、14世紀、チュートン王 Teutonic knights の下で大きくなり、ハンザ同盟に加盟し、その経済的重要性を増し、都市整備が行なわれ、集落の大通りが拡張され、広場が建設された。広場の一方の短い側面に町会所、地方には別の公共建築物である Artushof が建てられ、15世紀の終りから16世紀頃にかけて、長い側面は凹凸が直され広場全体のレイアウトは、レギュラーとなつた。短い側面にある Grüne 門から向い側の町会所の方に視界が開け、町会所の塔は広場を視覚的に支配し統一ある、緊張した空間を形づくっている。さらに、Neptune の泉水、ルネッサンス風の装いをこらした、中世風の軒並がこの広場をいそう親しみやすく、楽しいものになっている(8)。

Ⅲ-4 第4期 (17~19C)

この期は封建制の再編強化の時代であり、封建支配権力は、彼の権力示威の必要上、建築、庭園、都市計画等の大規模なモニュメントの建設を行うが、広場は、このようなモニュメントの装飾的、空間演出的な付属物へと変質する。すなわち、広場は、もはや共同体の成員の集落の核としての機能、集会場としての機能を、はたすも

のではなくてしまっている。バロック的な空間の表現の手段として、装飾的「空地」として利用されたにすぎないのである。そして、あるものは庭園的、公園的な機能をするものに変質していった。すなわち、共同体関係はもはや崩壊寸前であり、そのような共同体と本質的にかかわりあう広場は、その成立の、社会経済的基盤を失い、形態は広場の姿をとりながらも、実質は、広場にかわつて、つぎの資本主義時代において支配的となる、近代的個人の成立と本質的にかかわりあり公園への移行をなしつつあつた。

このようにして、かつての広場はもはや形骸と化しつつあり、あるものは死滅し、あるものは、交通のロータリー、建築の前庭、装飾的空地……等としてかろうじて生きつづけ、あるものは近代的公園として、来るべき時代に適応すべく積極的に変質していった。

図-8はパリのヴォージュ広場 Place des Vosges であるが、ここでは、すでに人々の集会できる空間としての広場としての機能を失い、装飾的、公園的な性格をもつ空間へと変質している。

図-8 パリのヴォージュ広場
(Zucker, Town and Square(9) より)

図-9は Stupinigi の城館の広場を示しているが、これは、いちじるしく庭園的な性格をおびているといえる

図-9 Stupinigi の城館の広場
(Zucker, Town and Square(10) より)

図-10は、パリのエトワール広場であるが、ここでは

広場は、たんなる交通のロータリーに変質している。かつての共同体の核としての広場の姿は、ここでは、うかがうべくもないのである。

図-10 エトワールの広場
(Zucker, Town and Square(11) より)

Ⅲ-5 ゲルマン封建都市の広場の展開

以上、ゲルマン封建都市の広場の展開過程を四期に分けて考察してきたが、その関係の概略を図-11のように模式的に図示することができると考えられる。

図-11 ゲルマン封建都市の広場の成立発展模式図

(25ページへつづく)

写真8 カナレ (池) (岡崎 1963)

図7 ロンデルを手にした平坦園の見通線
(ヴェントリニ)

写真9 ロンデルを通して館をみる (岡崎 1963)

(11ページより)

- (1) Sitte, C. ; Der Städtebau. Wien, 1922. P.73
- (2) Meurer, F. R. ; Der mittelalterliche Stadtgrundriss im nördlichen Deutschland. Berlin, 1914.
- (3) Zucker, P. ; Town and Square. New York, 1949 pl.16
- (4) Klaiber, C. ; Die Grundrissbildung der deutschen Stadt im Mittelalter. Berlin, 1912.
- (5) Zucker, P. ; op. cit. P.105
- (6) Sitte, C. ; op. cit. P.78
- (7) Zucker, P. ; op. cit. P.132
- (8) Zucker, P. ; op. cit. P.131-132
- (9) Zucker, P. ; op. cit. Pl.62
- (10) Zucker, P. ; op. cit. Pl.55
- (11) Zucker, P. ; op. cit. Pl.72

Summary

In this study, I try to explain the process of the formation and the development of town square in the Germanic feudal age.

In part II, it is perceived that the Cathedral Place is formed from the Narthex, Churchyard, and the Parvis, and the Market Place is formed from the broadened main street.

In part III, the developmental process is inquired into, and the result is following :

1st stage ; The socio-economic need of the square is contented with the Narthex and the main road

2nd stage ; The socio-economic need of the square forms the square itself

3rd stage ; The square develops typically

4th stage ; The square changes in quality.

(43.11.29 受付)